

# 『西洋事情』の文章

進藤 咲子

## 目次

- 一 はじめに
- 二 当時一般の文体と表記の傾向
- 三 福沢の文章平易化の苦心
- 四 福沢の三文体について
  - (一) 漢文書き下し文体
  - (二) 俗文
  - (三) 文語体
- 五 『西洋事情』の文体および構成について
- 六 『西洋事情』の文章表現上の特徴
  - (一) 新概念説明の方法
  - (二) 史記の記述について
    - 1 本紀に相当する箇所
    - 2 伝記など
  - (三) 修辭
  - (四) 翻訳文について

『西洋事情』の文章

## 一 はじめに

慶応二年から明治三年（一八六六—一八七〇）にわたって刊行された福沢諭吉纂輯の『西洋事情』は当時のもっとも適当な西洋の案内書であった。世に歓迎された証拠には初編が二十五万部（偽版も含めて）も売れたことが伝えられている。<sup>(1)</sup> 時の国の指導者たちもこれを参考にしたと言われる。<sup>(2)</sup> このようにベストセラーであり開国の手ごろな手引書ともなった『西洋事情』は彼自身がこの書の小引で「畢竟唯一時新聞紙の代用に供するのみ」と述べたように、この時期を過ぎると他のたくさんの啓蒙書とともにほとんど顧みられなくなってしまった。しかし百年以上も過ぎた今日ともなると幕末から明治初期にかけての日本の転換期に他書にさががけて多く読まれたということに資料としての価値があると思えてくる。そのみならず一代の啓蒙家と言われる福沢諭吉は、『西洋事

情』を最初の著作として明治三十一年の没年まで六十種以上の著書を刊行しているが三十数年にわたる著作活動の中で文章上いろいろな工夫を試みており、『西洋事情』はそのもっとも初期の試みという点で大きな意味をもつと考えられる。

思想を伝達する表現形式の解明は、福沢の啓蒙家としての態度、啓蒙の方法を知る上で必要な観点である。小稿ではこの観点に立って『西洋事情』の文章を、とくに文体と用語を中心に扱うことにした。

## 二 当時一般の文体と表記の傾向

福沢の文章は一言で言えば平易である。しかしその「平易」は当時の著作としてという限定がつく。彼の著作の文体は文語体であって、その中には漢文書き下し体を骨格としたものが多い。表記は漢字片かなまじり文のものが多数を占める（例『西洋事情』『文明論之概略』など。彼は漢学者の前座をつとめられるほどの素養があった）。結論から言えば福沢の文章は平易ではあるけれども学者系列の文章なのである。もっとも明治十七年刊行『通俗外交論』以降は漢字平かな文である。この変化についてはのちに改めて説明することとし、ここではこの事実に触れるにとどめる。

福沢の文章が平易であるということは当時他の多くが平易でなかったことを意味する。この点についてはのちに触れる。

『西洋事情』の初編が刊行されたのは慶応二年であるが、二年後の明治維新からは文章の世界すなわち書きことばの世界では多少の変化が起きている。それは漢文書き下し体（直訳体）の文章が書きことばの王座を占めたことである。この点について小中村清矩は次のように指摘している。

サテ維新以来ハ、官ヨリノ布令文ヲ始トシテ年月ニ印行セル学者ノ著述日毎ニ刷出セル新聞紙ニ至ルマテ拙陋ヲ離レテ、正シク麗シク物セルガ多カルニ、大方ハ所謂和漢混淆文ナレド、古ヘナルトハ変リテ、タ、漢文ヲ直訳シタル如キノミゾ多カル、此レニテハウチミニテハ此国ブリナルモ、能ク按スレハ猶支那ノ通行文ニシテ、醇乎独立ノ此国文トハ云難カルヘシ（漢文タレトモカクスレバ自ラ我国ノ文ナリ、只通シ易キニ任スヘシト云フ説モアラバ、論ノ限ニアラス）（「文章論」東洋学芸雑誌第十号 明治15・7・25）

このように文体上一種の流行とも見るべき現象が明治以降の漢文書き下し体の上に起こった。当時の文章を見るために新聞論説の一節を参考までに記して置こう。

一犬影ニ吠エテ万犬声ニ応ジ針ヲ以テ棒ト為シ蚓ヲ見テ竜ト認メ紛々称道スルモノハ則チ人情ノ常ニシテ古今ノ免レガタキ所ロナリ羽檄四ニ馳スルノ時ニ当レバ人心之ガ為メニ擾乱シ風声ニ驚キテ鶴唳ニ駭キ訛言流説其ノ間ニ百出シテ得テ信用ヲ取ルベキナク千里外一

発ノ砲声ノ為メニ驚嚇セラレ恟々トシテ砲弾ノ頭上ニ破裂スルガ如キ疑懼心ヲ懷クヲ免カレザルナリ（朝野新聞所載の論説 明治9・12・14）

このように漢文要素が多い。国文を平易にという献策が国語問題の先覚者前島密によって幕府に行なわれたのは慶応二年の暮であった。<sup>(3)</sup>それによっても国民啓蒙のための平易な文体を創設しようとする機運がないわけではなかったことが分かる。しかし平易化の実践は福沢を除けばわずかな試みがあるに過ぎなかった。<sup>(4)</sup>

次に表記についても見て置きたい。当時庶民一般が親しんだ文章は漢字平がな文であった。当時でも日常便利な表記は平がなである。しかし明治以降の文章は布告も著述も教化訓導の書も漢字片かな文であった。片かなを平仮名にしようと提唱したのは清水卯三郎である。

凡ソ読易ク解リ易ク言語一様ノ文章ヲ記シテ以テ天下ニ藉キ、民ノ智識ヲ進マシムル者ハ、固リ学者教師ノ任ナリ。然ルニ之ヲ捨テ其ノ習フ所ニ慣レ、奇字新語ヲ挿ンテ以テ誇ル者ハ大ニ其職ヲ怠ル者ナリ。謹ンテ顧ミスンハアル可ラサルナリ。又片仮名ヲ知ル者モ亦天下多シトセス。是ヲ以テ余ハ只平仮名ヲ用フルコトヲ主張ス。凡平仮名ノ通常タル、招牌、暖簾、稟帖、稗史ノ類觀テ見ルヘシ。則余カ「舍密ノ階」ヲ訳述シテ同志ニ謀ル所以ナリ。（平仮名ノ説）『明六雑誌』第七号 明治17・5 明治文化全集 雑誌篇91ペ 昭和3刊）

『西洋事情』の文章

清水がこの論を平がなで書かなかったのは「我平仮名ノ説ノ如キ只後進ノ人ニ便スル耳。此ノ編ノ如キ、偏ニ学者ニ謀ル者ナリ。」というわけだと言う。当時の情況を知る手がかりとなろう。ちなみに清水が「平仮名ノ説」を載せた『明六雑誌』は当時最高の学術雑誌であるが四十三号で廃刊するまでの間で漢字平がな文は津田真道が和文体で書いた「本は一つにあらざる論」だけである。

福沢が平仮名についてどのような見解を持っていたかは『福沢文集』（明治11・1—12・8）所収の記事の中に見ることができる。

平仮名と片仮名とを較べて市在民間の日用に孰れか普通なりやと尋れば、平仮名なりと答へざるを得ず。男女の手紙に片仮名を用ひず。手形証文受取書に之を用ひず。百人一首は固より草雙紙其他民間の読本には全く字を用ひずして平仮名のみもの者もあり。又在町の表通りを見ても、店の看板、提燈、行燈等の印にも、絶へて片仮名を用ひず。日本国中の立場居酒屋に、めし、にしめと障子に記したるはあれども、メシ、ニシメと記したるを見ず。今このめしの字は俗なるゆゑメシと改む可しなど国中に諭告するも、決して人力の及ぶ可き所に非ず。されば爰に小学の生徒ありて、入学の後一、二箇月を過ぎ、当人の病氣か、親の病氣か、又は家の世帯の差支を以て、廃学することもあらん。其廃学のとくに、是迄学び得たるものを調べて、片仮名を覚へたると平仮名を覚へたると孰れか生涯の利

#### 『西洋事情』の文章

益たる可きや。平仮名なれば、極々低き所にてめしやの看板を見分る便にも為る可きことなれども、片仮名にては殆ど民間に其用なしと云ふも可なり。是等の便不便を考れば、小学の初学第一歩には平仮名の必要なること疑を容る可らざるなり。（「小学教育の事二」）

『福沢文集二編』岩波版『福沢諭吉全集』原文は漢字片かな文）

福沢は明治十二年にはこのように平かな説を打ち出しそれ以前に『訓蒙竊理図解』や『世界国尽』など婦女子向きの文章および明治十七年『通俗外交論』以降の著作は漢字平かな交じり文で書かれているが彼の本格的な文章は漢字片かな交じり文である（『学問ノス、メ』初編の初版本は平かな交じり文であるが再版後十七編まで全編片かな交じり文である）。しかし幕末ごろは学者の書く文章でもそれが新聞の記事に類するものであれば平かな交じり文で書かれているものがある。たとえば蕃書調所の関係の洋学者が組織した会訳社（中心は柳河春三）から発行した『中外新聞』や明治のジャーナリストとして活躍した福地源一郎主宰の『江湖新聞』などはこれらは江戸後期の普通文と考えてよからう。漢字平かな交じり文で書かれている。

先年以来横浜開板のタイムス又ヘラルドと名くる新聞を訳し、又は英吉利、亜墨利加、法蘭西、和蘭諸国の新聞をも得るたび毎に訳出し、写本にて伝へ来ると雖も、筆者の煩はしきに堪へざるを慮り、此度活字にて印行するものなり。（『中外新聞』第一号慶応4・2）

幕末  
明治新聞全集3所収に拠る）

明治初期の新聞になるとこの種のものは漢字片かな交じりで書くのが普通である。

#### 三 福沢の文章平易化の苦心

福沢が蘭字を学んだのは大阪の大学医緒方洪庵である。洪庵の翻訳についての教えが福沢に大きな影響を与えたことは福沢自身が『福沢全集緒言』で述べている。洪庵の教えの中には、武家は無学不文の輩が多いから難解の文字を用いるな、玉篇や雑字類編のような辞書類で訳字の捜字をするな、なぜならこれらを用いれば難字難文を作り出す恐れがあるからだ、手元に置くのは俗間の節用字引でたくさんである、といったことである。福沢は師から読者の識字能力に応じた表現を工夫するように教えられた。福沢は明治に入ってからには武家層ばかりでなく一般の人々にまで読者層を広げていく。「唯早分りに分り易き文章を利用して通俗一般に広く文明の新思想を得せしめんとの趣意にして、乃ち此趣意に基き出版したるは西洋旅案内、竊理図解等の書にして、当時余は人に語りて云く、是等の書は教育なき百姓町人輩に分るのみならず、山出の下女をして障子越に聞かしむるも其何の書たるを知る位にあらざれば余が本意に非ず」（『福沢全集緒言』）として文章平易化の信念を深めていく。「自分の文章は最初より世俗と決心し、世俗通用の俗文を以て世俗を文

明に導くこと、恰も真宗の開祖親鸞上人が自から肉食して肉食の男女を教化したるの轡に倣ひ、何処までも世俗平易の文章法を押し通し、世俗と共に文明の佳境に達せんとするの本願にして」(『福沢全集緒言』)と彼自身述べているところである。福沢は俗文主義に徹しようとした。そのため「世俗」の意を寓した「三十一谷人」の五字を印章に刻んで用いたほどである。このように福沢はつねに読者を強く意識していた。

ところで当時の翻訳家たちの文章はどうだったろうか。「江戸の洋学社会を見るに、著訳の書固より多くして何れも仮名交りの文体なれども、動もすれば漢語を用ひて行文の正雅なるを貴び、之が為めに著訳者は原書の文法を読破きて文意を解するは容易なれども穩当の訳字を得ること難くして、学者の苦みは専ら此辺に在るのみ。其事情を丸出しに云へば、漢学流行の世の中に洋学を訳し洋説を説くに文の俗なるは見苦しとて、云はば漢学者に向て容を装ふものゝ如し。蓋し百年来の翻訳法なれども、斯くては迎も今日の用を弁ずるに足らざるを信じ」(『福沢全集緒言』)と福沢は批判している。

福沢は自分の文章表現上の工夫をいろいろ書きのこしているがもっとも具体的に示しているのは『福沢全集緒言』である。それです、しばらくこれについて見ていくことにする。江戸の洋学社会の翻訳法を批判した彼は「依て竊に工夫したる次第は、漢字の間に仮名を挿み(注 または、あるいはの語を補うと意味が通じる) 俗文中の候の字を取除くも共

に著訳の文章を成す可しと雖も、漢文を台にして生じたる文章は仮名こそ交りたれ矢張り漢文にして文意を解するに難し。之に反して俗文俗語の中に候の文字なればとて其根本俗なるが故に俗間に通用す可し。但し俗文に足らざる所を補ふに漢文字を用ふるは非常の便利にして、決して棄つ可きに非ず。行文の都合次第に任せて遠慮なく漢語を利用し、俗文中に漢語を挿み、漢語に接するに俗語を以てして、雅俗めちやくに混合せしめ、恰も漢文社会の靈場を犯して、其文法を紊乱し」たと言っている。それでは漢文社会の靈場をいかに犯したかと言うと、「例えば『之を知らざるに坐する』或は『此事を誤解したる罪なり』と云へば漢文の句調にて左まで難文にも非ざれども、態と之を改めて『之を知らざるの不調法なり』又『此事を心得違したる不行届なり』と記すが如き、少年の時より漢文に慣れたる自身の習慣を改めて俗に従はんとするは随分骨の折れたることなり。」といった工夫や苦勞をしたと言う。

#### 四 福沢の三文体について

福沢は自ら文章の工夫についてこのように語っているが、福沢の実際の文章はどうだったであろうか。ここでは文体の上から漢文書き下し体、俗文、文語体の三つに分類して見ることにしたい。

##### (一) 漢文書き下し体

(1) 洋籍ノ我邦ニ舶来スルヤ日既ニ久シ其翻訳ヲ経ルモノ亦尠カラス然

シテ窮理地理兵法航海術等ノ諸学日ニ闢ケ月ニ明ニシテ我文明ノ治ヲ助ケ武備ノ闕ヲ補フモノ其益豈亦大ナラスヤ然リト雖トモ余竊ニ謂ラク独リ洋外ノ文学技芸ヲ講窮スルノミニテ其各国ノ政治風俗如何ヲ詳ニセサレハ仮令ヒ其学芸ヲ得タリトモ其経国ノ本ニ反ラサルヲ以テ蓄ニ実用ニ益ナキノミナラス却テ害ヲ招ンモ亦計ルヘカラス

(『西洋事情』小引 一丁オ)

(2) 学校ノ法ハ最モ嚴正ナリ教授ノ間。言語セス親指セス法ヲ犯ス者ハ罰アリ然レトモ間時ハ随意ニ遊ソフヲ禁セス是カタメ学校ノ傍ニハ必ス遊園ヲ設ケ花木ヲ植ヘ泉水ヲ引キ遊戲奔走ノ地トナス又園中ニ柱ヲ立テ梯ヲ架シ綱ヲ張ル等ノ設ヲナシテ学童ヲシテ柱梯ニ攀リ或ハ綱渡リノ芸ヲナサシメ五禽ノ戯ヲ為テ四肢ヲ運動シ苦学ノ鬱閉ヲ散シ身体ノ健康ヲ保ツ(『西洋事情』学校初編卷之一 二九丁オ)

(3) 人或ハ云ク政府ハ暫ク此愚民ヲ御スルニ一時ノ術策ヲ用ヒ其智徳ノ進ムヲ待テ後ニ自カラ文明ノ域ニ入ラシムルナリト此説ハ言フ可クシテ行フ可ラス我全国ノ人民数千百年専制ノ政治ニ寤メラレ人々其心ニ思フ所ヲ発露スルコト能ハス欺テ安全ヲ偷ミ詐テ罪ヲ遁レ欺詐術策ハ人生必需ノ具ト為リ不誠不実ハ日常ノ習慣ト為リ耻ル者モナク怪ム者モナク一身ノ廉恥既ニ地ヲ払テ尽キタリ豈国ヲ思フニ違アラシヤ(『学問ノス、メ』四編 四丁オ)

例文中の——線は漢文訓読特有の言いまわしであり……線は豈のよう

な陳述副詞を受ける助詞である。このように漢文書き下し文は漢文を訓読する際の固定した表現を持つことに特徴がある。これは漢籍を日本語として読む際の伝統的な読み方である。又この文体では漢語が多用されることも特徴である。この例文でも同様である。漢語の類を抜き出してみよう。

(1) 洋籍 舶来(ス) 翻訳 窮理 地理 兵法 航海術等 諸学 文明  
治 武備 闕 益 大 余 洋外 文学技芸 講窮(ス) 各国 政治  
風俗 学芸 経国 実用 害

(2) 学校 法 嚴正(ナリ) 教授 言語(ス) 親指(ス) 法 罰 間時  
随意 禁(ス) 遊園 花木 泉水 遊戲奔走 地 園中 架(シ) 学  
童 五禽ノ戯(注 五禽戯の訓読) 四肢 運動(ス。注 用法は他動  
詞) 苦学 鬱閉 散(ズ) 身体 健康

(3) 政府 愚民 御(ス) 一時 術策 智徳 文明 域 説 全国 人民  
数千百年 専制 政治 発露(ス) 安全 欺詐術策 人生心需 具  
不誠不実 日常 習慣 一身 廉耻 地ヲ払フ(注 払地の訓読)

(1) から(3)までの漢語を並べてみると、とくにむずかしい漢語は使われていない。日常語でないという点から見ると、それは漢文書き下しの文体という制約からくることであるが、漢語サ変(例講窮ス 親指ス)、四字漢語(例遊戯奔走 欺詐術策) 漢籍に典故を持つ語の訓読(例五禽ノ戯 地ヲ払フ) などが見られる。しかし文章を飾り立てるような

ことばはない。平明な実用文である。なお例文(2)の末尾は「保ッ」でなく、「保タシム」とした方がよい。主語は明示されていないが学校であり、学童は主語ではないからである。福沢には往々無造作な表現が見られる。

例文(1)(2)は『西洋事情』から引いたが福沢はこの書の中で文章について次のように記している。

本編ノ翻訳ハ今茲三月ヨリ公務ノ暇。業ヲ起シ六月下旬ニ至リ初編初テ稿ヲ脱セリ之ヲ校正スルニ及テ或人余ニ謂ヘル者アリ此書可ハ則チ可ナリト雖トモ文体或ハ正雅ナラサルニ似タリ願クハ之ヲ漢儒某先生ニ謀テ正刪ヲ加ヘハ更ニ一層ノ善美ヲ尽シテ永世ノ宝鑑トスルニ足ル可シト余笑テ云ク否ラス洋書ヲ訳スルニ唯華藻文雅ニ注意スルハ大ニ翻訳ノ趣意ニ戾レリ乃チ此編文章ノ体裁ヲ飾ラス勉メテ俗語ヲ用ヒタルモ只達意ヲ以テ主トスルカ為メナリ然ルニ今之ヲ某先生ニ謀ルモ徒ニ難字ヲ用ヒ読者ヲシテ困却セシムルノ外決シテ他事ナカルヘシ加之漢儒者流カ頑僻固陋ノ鄙見テ以テ原書ノ情実ヲ誤認ムルモ亦図ル可ラス是余カ甚タ欲セサル所ナリ（「小引」二二丁ウ—三丁オ）

文章を飾らず俗語を用いた達意を主旨としていることを強調しているが、漢儒者の華藻文雅な文飾をきらうとともに彼らの考えが頑僻固陋だと罵倒している。ここにも彼の文章上の開明主義の実践が見られる。

なお『西洋事情』には次のような文章も見られる。

#### 『西洋事情』の文章

院（注 棄児院）ノ戸外ニ鈴アリテ子ヲ棄ル者戸外ニ子ヲ置キ鈴ヲ鳴ラシテ去レハ院ヨリ出テ其子ヲ拾テ之ヲ棄ル者ヲ問ハス既ニ院ニ入レハ衣服ヲ与ヘ乳母ヲ附ケ丁寧ニ養育シテ次第ニ成長スレハ其才ニ応シテ學術技芸ヲ教ヘ活計ノ方ヲ知ルニ及テ之ヲ出タス（卷之一三十六丁ウ）

この文章は例文(1)(2)にくらべ一段とやさしくなっており漢文書き下し文の特徴が少ないように見えるがやはり骨格は漢文である。「ノヲ知ルニ及ンテ之ヲ出タス」などはまさに訓読の表現である。しかし、つとめて日常語を用いており達意を主旨とする福沢の本領が発揮されている。福沢の文章は次第に右に見たような特徴が少なくなってくる。

例文3は『学問ノス、メ四編』から引いた。『学問ノス、メ』は元来民間の読本又は小学教授本として読み易さにとくに留意したもののだが、四編五編は学者（注 学問をする人）相手に書いたからむつかしくしたと言っている。

世ノ学者ハ大概皆腰ヌケニテ其氣力ハ不慥ナレトモ文字ヲ見ル眼ハ中々慥ニシテ、如何ナル難文ニテモ困ル者ナキユヘ此二冊（注 四、五編）ニモ遠慮ナク文章ヨムツカシク書キ其意味モ自カラ高上ニナリテコレガタメモト民間ノ読本タル可キ学問ノス、メノ趣意ヲ失ヒシハ初学ノ輩ニ対シテ甚ダ氣ノ毒ナレドモ（五編一丁ウ）

福沢は人を見て法を説くという方法で読者層によって文体を変えたの

でこのような記述も見られるのである。

## (5) 俗文

福沢が工夫した福沢流の俗文は、世上に行なわれる俗文中の候の字を取り除くことであった。「俗文俗語の中に候の文字なければとて其根本俗なるが故に俗間に通用す可し。但し俗文に足らざる所を補ふに漢文字を用ふるは非常の便利にして、決して棄つ可きに非ず。」という事で、この趣旨に基いて出版したのが『西洋旅案内』や『窮理図解』<sup>(6)</sup>などである。彼の言う候のついた俗文とは次のような文体と考えられる。

- (1) さて水の氷に変わるを不思議に被思召旨、御尤の様に候得共、今一段深く御勘考被成候は、左様にも有之間敷、水は温気の増減に由り其形を三通りに変る者にて、湿気極めて減少すれば氷となりて堅く、少しく増せば水と為りて流れ、尚これに温気を増して沸騰せしむれば蒸気となりて空中に散ず。さ候得者何れを以てその本体と可致哉、寔と難差定、(『啓蒙手習之文下』岩波版『福沢諭吉全集』15—16 P 原文も序文だけが漢字片かな文で本文は漢字平かなである)

- この手紙に近い内容のものを『窮理図解』に求めてみよう。
- (2) 氷を解して水となすには温気なかるべからず其水を暖めて湯となすには又温気を増さざるべからず其湯を沸して蒸気となすには更に又温気を加へざるべからずされば今蒸気を変して湯となし湯を冷して水となし水を凝して氷となすときは初吸込みし温気を吐出して元に返すべきの理なり(初編中十五丁オーウ)

例文(1)から候ないし候文特有の表現や敬語を除くとすると、たとえば「不思議に被思召旨、御尤の様に候得共、今一段深く御勘考被成候は、左様にも有之間敷」は「不思議に思ふはもつとも様なれども、今一段深く考えればさほど(ふしぎ)のことにてもあるまじ」のようになる(表現のまずさはお許し願いたい)。接続詞「さ候得者」は「されば」に置き換えればよい。「水は温気の増減に由り」からは『窮理図解』とほぼ同じ文体となる。もっとも『窮理図解』の方がもっと平易である。

『啓蒙手習之文』にある「沸騰せしむれば」といったかたい表現は見当らない。その上、『窮理図解』は総ふりがなを付ける。こうして福沢のいう俗文ができ上がる。例文(2)の俗文の特徴は漢字平がなまじり文であって、むずかしい漢字を使っていないこと(『文字之教』に見られる漢字制限説参照)、漢字にはすべてふりがなをつけること、漢語が少ないこと(とくに用言はサ変の「変ず」を除いてすべて和語でまかなっている)、接続助詞「て」の多用によって表現をやわらげていること(例「氷を解して水となす」、口調がよいこと(例「温気なかるべからず」増さざるべからず」加へざるべからず」のように文末をそろえる)などを挙げる事ができよう。

次に福沢が自身で俗中の俗文と云っている『世界国尽』を見ることにする。

- (3) 暹羅と尾留満のあひたよりみなみに長き満落花は須磨多良島と相對



し東西僅か二十余里間の海を満落花の瀬戸と名けて万国の船の往来も賑しく瀬戸を出れば「印度海」北へ向て辨輕の入海深く入こめは「小栗」の河の東岸に開きし都は輕骨田「英吉利領」の惣奉行「印度」地方を支配して軍艦商船数多く亜細亞諸国と「英吉利」の威勢か、やくみなもとは前後印度の領地とそ（九オ―十一オ）

この文体の特徴は、一文は長いけれどもも五七調で唱えやすい（暗誦に便利）、和語が多い、当時の一般の人々のよく知っていることばを使う（例惣奉行、瀬戸（むずかしく言えば海峡）、外国の地名を表わす文字が通行の学者表記を無視して福沢独特で、一般の人々に分かりやすい、日本人がなじみやすい、発音しやすい文字を使っている（例辨輕 輕骨田）などである。地名については福沢自身が次のように言っている。

此書中には勉て日本人に分り易き文字を用るやふにせり実はいろは計り用ても済むべき筈なれとも本字を記して脇へ仮名を附れば記憶するに便利なり、辨輕の辨の字は辨慶の辨の字なり（凡例六丁ウ）

一般庶民、児童を相手に日本以外に広い世界のあることを教えようとした福沢の啓蒙的な姿勢がここにも窺われる。後年福沢はこれは江戸の寺小屋の手本である江戸方角や都路などを参考に何度も熟読暗誦してから書いたと言っている。しかしさすがの福沢もこれを書いた当時俗に過ぎると思ひ、重味をつけるために米国学士ワルブランク氏の一文を訳して巻首に掲げたと言ふ。(7) 福沢も学者としてあまりの俗文が嘲笑をかうこ

とを恐れたのであろう。この時代は文章の体裁を整えること、威儀を正すことが大切だった。それを意識する福沢もやはり時代の人であった。

### (三) 文語体

これまで福沢の漢文書き下し体と俗文とを見てきたが、その中間に位置する文体がある。それをかりに福沢の文語体と名付けておく。

(1) 学問トハ唯ムツカシキ字ヲ知り解シ難キ古文ヲ読ミ和歌ヲ楽ミ詩ヲ作ルナド世上ニ実ノナキ文学ヲ云フニアラズコレ等ノ文学モ自カラ人ノ心ヲ悦バシメ随分調法ナルモノナレトモ古来世間ノ儒者和学者ナドノ申スヤウサマデアガメ貴ムベキモノニアラズ古来漢学者ニ世帯持ノ上手ナル者モ少ク和歌ヨクシテ商売ニ巧者ナル町人モ稀ナリコレガタメ心アル町人百姓ハ其子ノ学問ニ出精スルヲ見テヤガテ身代ヲ持崩スナラントテ親心ニ心配スル者アリ無理ナラヌコトナリ畢竟其学問ノ実ニ遠クシテ日用ノ間ニ合ハヌ証拠ナリ（『学問ノス、メ初編』二丁ウ―三丁オ）

主観的な恣意的な判断ではあるが日常語生活語と考えられる語に――線、くだけた表現に――線を付けた。『窮理図解』と異なり漢字かな交じり文（先にも述べたように初編の初版本は平かな交じり文）でふりがながない。彼の言う俗文中に漢語をさしはさみ、漢語に接するに俗語を以てし、漢文社会の靈場を犯した独特の文体が定着してくるのだ。

(2) 価トハ品物ノ位ナリ米一俵ノ価二円ニシテ麦一俵ノ価一元ナレハ米

ノ位ハ二ニシテ麦ノ位ハ一ナリ絹布ノ価ハ木綿ヨリモ高ク金銀ハ鉄ヨリモ貴シ斯ク物ノ価ノ相違スルハ何故ト尋ルニ、世ノ中ニ之ヲ好ム人多キト少ナキトニ由テ価ノ高下アルコトナリ今世間ノ人ニ米ヲ好ム者ハ麦ヲ好ム者ヨリモ多キガ故ニ米ノ価高クシテ麦ノ価低キナリ（『民間経済録』「第一章 物ノ価ノ事」明治10・11）

(2)は文語文であるが漢文書き下し文と違って訓読固有の表現がほとんどない。文章は平易であるがそれかといって例文(1)ほどにくだけでもおらず淡々とした講義調である。

(3)餅ハ餅屋酒ハ酒屋各其職分アリ独立ノ一國アレバ政府ナカル可ラズ國ヲ守ル為ニハ兵備入用ナリ罪人アレバ刑法入用ナリ政府ヲ支ルニハ租税ノ法ナカル可ラズ外國ト交ルニハ条約ナカル可ラズ曆ノ法ヲ定メ年号ヲ撰ビ貨幣ノ位ヲ分チ其名目ヲ定ル等此他都テ全国一般ニ及ホシテ人民総体ノ關係タル可キ事ハ必ス政府ノ一手ニ引受ケ國內ノ各処ニ於テ区々ノ処置アル可ラズ學者ノ言葉ヲ用レバ之ヲ中央政府ノ政權ト云フ又都鄙ノ地方ニテ人民が相談ノ上ニテ井戸ヲ浚ヘ芥溜ヲ掃除シ火ノ用心夜廻リノ番ヲ設ケ作道ヲ開キ土橋ヲ掛ケ宮寺ヲ建立シ常夜燈ヲ燈シ師匠ヲ招待シテ町村ノ子供ヲ教ヘ芸人ヲ雇フテ手躍ヲ催フス等ノ事ハ年久シキ仕来ニテ是等ノ相談ニ付キ町村ノ人民が寄合ヒ入用ノ錢米ヲ取立テ其遣払ヲ為シテ一町一村ノ便利ヲ起シ町内繁昌村中安全ノ趣意ヲ達スルハ固ヨリ政府ノ関ル所ニ非スシ

テ町村ノ権内ニ在ルコトナリ（『通俗民権論』「第二章官民職分之事」20—22P 明治11・8）

例文(3)は漢文訓読の要素と（―線を付けた箇所）和文体および俗文要素（……線を付けた箇所）が交じりあった文語体である。『通俗民権論』は通俗に分かり易いように民権論を説いたもので、例文中にも「學者ノ言葉ヲ用レバ之ヲ中央政府ノ政權ト云フ」と言った仲介者的表現も見られる。福沢の著作はその後のこの文語体で書くものが多くなる。

福沢の文体を三種に分けてその特徴を見てきたが、この小調査によって福沢の文章にはいわゆる俗文から漢文書き下し体までの振幅があることが分かった。彼の啓蒙家としての姿勢は文体の工夫の上にも明確に読みとることができる。なお山本正秀氏は福沢の『世俗通用の俗文』意識、漸進的改良主義による『福沢調』の実態と、漢字節減論および実施等について福沢の著作を広く詳細にご調査の上、この「世俗通用の俗文」に言文一致への地ならしの意義を認められた。<sup>(8)</sup>

## 五 『西洋事情』の文体および構成について

以上長々と福沢の文章や当時一般の文章を見てきたが、それは福沢の最初の著作である『西洋事情』の文体を位置づけする目的からであった。『西洋事情』の文章の骨格は漢文書き下し体である。<sup>(9)</sup>

『西洋事情』は武家階級の学生をおもな読者層としており、決して一

般庶民を対象に書かれたものではない。福沢は師緒方洪庵の教えもあり武家階層に無学不文の輩が多いことはよく認識していたが一応は漢籍が読める者を読者として設定していたらうから文体も迷うことなく漢文書き下し体を選んだのであろう。しかしその文章は虚飾のない平明な実用文であることはすでに見てきた。福沢はこの階層の人々によって「数年ノ後ハ人皆原文ヲ解シ此編ノ如キモ亦牖下覆甕ノ故紙トナランコト」を望んでいた。

なお『西洋事情』の体裁が当時の一般の書物と異なるのは漢文の序文や他人の序文がないことである。また闕字や闕画のないことである。もっとも福沢が初めて刊行した『増訂華英通語』（万延元）は自ら記した漢文の凡例があり、そこには皇国や本邦という文字の上が闕字にしてある。のち福沢はこのことをひどく後悔している。<sup>(10)</sup> こういう点福沢は群を抜いて進歩的な人であった。

この『西洋事情』は初編三冊、外編三冊、二編四冊の計十冊本である。書誌的なことは富田正文氏の解説を見ていただきたい。<sup>(11)</sup>

『西洋事情』は言うまでもなく外国事情の紹介である。開国して西欧文明とじかに接する日本人のための手引書である。外国の様子を知らせるためイギリスやアメリカで出版された歴史や地理の書物を参照して各国ごとに（合衆国、荷蘭、英国、魯西亜、仏蘭西）、史記、政治、海陸軍、錢貨出納の順に記述し、なお西洋を基本的に知るためのことから

#### 『西洋事情』の文章

（これは福沢が欧州やアメリカに派遣された時の実地見聞のメモおよび経済論等の諸書を中心として編集<sup>(12)</sup>）を初編巻之一に備考として掲げている。備考には政治 収税法 国債 紙幣 商人会社 外国交際 兵制 文学技術 学校 新聞紙 文庫 病院 貧院 啞院 盲院 癲院 痴兒院 博物館 博覧会 蒸気機関 蒸気船 蒸気車 伝信機 瓦斯燈が解説されている。外編はおもに *Political Economy* (Chamber's Educational Course) の翻訳である。この翻訳は西洋文明の基底にある精神を知らせることが目的であった。

#### 六 『西洋事情』の文章表現上の特徴

今までの所で『西洋事情』の構成の大体は見てきたので、これからはいくつかの角度からその文章表現を見ることにする。

##### (一) 新概念説明の方法

自主任意」国法寛ニシテ人ヲ束縛セス人々自カラ其所好ヲ為シ士ヲ好ムモノハ士トナリ農ヲ好ムモノハ農トナリ士農工商ノ間ニ少シモ區別ヲ立テス固ヨリ門閥ヲ論スル事ナク朝廷ノ位ヲ以テ人ヲ輕蔑セス上下貴賤各々其所ヲ得テ毫モ他人ノ自由ヲ妨ケスシテ天稟ノ才力ヲ伸ヘシムルヲ趣意トス但シ貴賤ノ別ハ公務ニ当テ朝廷ノ位ヲ尊ブノミ其他ハ四民ノ別ナク字ヲ知り理ヲ弁シ心ヲ勞スルモノヲ君子トシテ之ヲ重ンシ。文字ヲ知ラスシテ力役スルモノヲ小人トスルノミ

本文自主任意自由ノ字ハ我儘放盪ニテ国法ヲモ恐レストノ義ニ非ラス総テ其国ニ居リ人ト交テ氣兼ネ遠慮ナク自力丈ケ存分ノコトヲナスベシトノ趣意ナリ英語ニ之ヲ「フリーダム」又ハ「リベルチ」ト云フ未タ的当ノ訳字アラス（卷之一 六丁ウ）

これは文明の政治を行うには、六か条の要訣があるとしてあげたものの第一条である。

西欧の文明開化の国々には政治上の自由の思想がある。言うまでもなく封建制度の日本の政治では考えることのできなかつた思想である。ところでフリーダム又は「リベルチ」の訳語としてまず「自主任意」が掲げてあるが、これは訳語「自由」が定着しなかつた時代の訳語の一つである。蛇足ながら訳語「自由」についてはかつて考察を試みたことがあるので参照していただきたい。<sup>(13)</sup>「自主任意」の説明として国法寛ニシテ人ヲ束縛セスは妥当と考えられるが、これだけでは自由についてまったく白紙の日本人には分らない。そこで、それは階級的差別がなく平等で人々々天稟の才能が伸ばせるのだということを言うために当時日本人がその中で生活していた、すなわち士農工商の階級制度を材料として使つてさらに具体的な説明をしている。その部分が人々自カラ其好ヲ為シ士ヲ好ムモノハ士トナリ才力ヲ伸ヘシムルヲ趣意トスまでである。士ヲ好ムモノハ士トナリ農ヲ好ムモノハ農トナリは対句で口調もよい。さらに続けて四民は平等であつて人の軽重は、その能力によって二分類される。すなわち君子と小人である。まことに簡單明瞭である。割注は「自主任意」「自由」の訳語としての定義で、これは日本の我儘放盪とは異なると言っている。この割注は本文より一段とくだいた記述で、我

儘放盪、人ト交テ氣兼遠慮ナク、自力丈ケ存分ノ事のように日常語を駆使した表現である。しかしこの説明で読者は理解できたであろうか。職業選択の自由ということで士を望めばなれるということや君子と小人の二分類など納得できたであろうか。また君子も小人も儒者流が好んで使うことばではなかったか。どうも福沢の説明はせっかちに過ぎたようである。

この種の不備を含めてであろうか、明治三年刊行の『西洋事情』二編卷之一には次のような弁明がある。

西洋事情初編ノ第一卷ニ於テ先ツ政治。收税法。国債等ノ数箇条ヲ示シ以テ本篇ノ備考ニ供シタレトモ畢竟唯梗概一斑ノ紀事ノミニテ未ダ利害得失ノ議論ヲ詳ニセリト謂フベカラズ蓋シ我邦ニ於テ始テ英書ヲ翻訳スルヤ其事業固ヨリ容易ナラズ加之現今当務ノ要ヲ挙ケ学者ヲシテ早ク外国ノ事情ニ通スルヲ得セシメントスルニ急ナレハ自然疎漏ノ譏ヲ免レス又此譏ヲ顧ルニ遑アラス（一丁オウ）

福沢が『西洋事情』の出版をいかに急いだか、また当時の状況をもこの箇所は雄弁に物語っている。福沢はここで再び「自由（自主任意は用いてない）」について説明をしている。少し長いが引用する。

譬ハハ訳書中ニ往々自由原語「リベルチ」通義原語「ラ」ノ字ヲ用ヒタルコト多シト雖トモ実ハ是等ノ訳字ヲ以テ原意ヲ尽スニ足ラス（中略）

「リベルチ」トハ自由ト云フ義ニテ漢人ノ訳ニ自由。自専。自得。自若。自主宰。任意。寛容。従容。等ノ字ヲ用ヒタルトモ未タ原語

ノ意義ヲ尽スニ足ラズ

自由トハ一身ノ好ムマ、ニ事ヲ為シテ窮屈<sup>キウクツ</sup>ナル思ナキヲ云フ古人ノ語ニ一身ヲ自由ニシテ自カラ守ルハ万人ニ具ハリタル天性ニシテ人情ニ近ケレバ家財富貴ヲ保ツヨリモ重キ事ナリト

又上タル者ヨリ下ヘ許シコノ事ヲ為シテ差構<sup>サシカマヒ</sup>ナシト云フ事ナリ譬ヘハ読書手習ヲ終リ遊ビテモヨシト親ヨリ子供ヘ許シ公用終リ役所ヲ退キテモヨシト上役ヨリ支配向ヘ許ス等はナリ

又御免<sup>ゴメン</sup>ノ場所御免ノ勸化。殺生御免ナドイフ御免ノ字ニ当ル

又好悪<sup>スエキヤラヒ</sup>ノ出来ルト云フ事ナリ危キ事ヲモ犯シテ為サネバナラヌ心ニ思ハヌ事ヲモ枉ケテ行ハネバナラヌナド、心苦シキ事ノナキ趣意ナリ

故ニ政事ノ自由ト云ヘバ其国ノ住人ヘ天道自然ノ通義<sup>下ニ詳ナリ</sup>ヲ行

ハシメテ邪魔ヲセヌ事ナリ開版ノ自由ト云ヘハ何等ノ書ニテモ刊行勝手次第ニテ書中ノ事柄ヲ咎メザル事ナリ宗旨ノ自由トハ何宗ニテモ人々ノ信仰スル所ノ宗旨ニ帰依セシムル事ナリ千七百七十年代亜米利加騒乱ノ時ニ亜人ハ自由ノ為メニ戦フト云ヒ我ニ自由ヲ与フル歟否ザレバ死ヲ与ヘヨト唱ヘシモ英国ノ暴政ニ苦シムノ余。民ヲ塗炭ニ救ヒ一國ヲ不羈独立ノ自由ニセント死ヲ以テ誓ヒシ事ナリ當時有名ノフランキンガ云ヘルニハ我身ハ居ニ常処ナシ自由ノ存スル所即チ我居ナリトノ語アリサレバ此自由ノ字義ハ初篇卷之一

『西洋事情』の文章

第七葉ノ割註ニモ云ヘル如ク(注 前出12ペ)決シテ我儘放盪ノ趣意ニ非ラス他ヲ害シテ私ヲ利スルノ義ニモ非ラス唯心身ノ働ヲ逞シテ人々互ニ相妨ケス以テ一身ノ幸福ヲ致スヲ云フナリ自由ト我儘トハ動モスレハ其義ヲ誤リ易シ学者宜シクコレヲ審ニスヘシ(三オ―五オ)

このようにして初編を刊行してから三年後にやや詳細な説明を施している。その順序は一身の自由、心の自由、政事上の自由、出版の自由、宗旨の自由、一國不羈独立の自由というように自由の内容を限定して書き進めている。また福沢の文章が常にそうであるように、読み手に分かりやすいように卑近な例が用いてある。子供の自由、下役の自由、「自由」は日本語の「御免」に相当することばであるなどこでも日本人が自分たちの生活の中で理解することができるよう工夫してある。一國独立の自由にはフランクリンのことばを引いている。最後に初編と同様、我儘放盪とは別であるとして注意をうながしている。「自由」は理念の-highことばで説明することも理解することもむずかしい。しかも近代生活を営む上では必要不可欠なことばである。福沢の二度にわたる説明の苦心もここにあったと思われる。

なお参考までに『西洋事情』と並んで明治初期のベストセラーの一つであった内田正雄の『輿地誌略』(明治四)の「自由」の説明を見ておこう。

独立不羈又自由ト訳ス著実ノ訳字ヲ見ス本文姑ク之ヲ兼ネ用フ大凡

文明ノ民不羈自由ヲ得ルト云フハ放恣ニシテ無頼ヲ為スニ非ラズ只  
条理ニ背カザル事ハ人々随意ニ之ヲ行ヒ政府ヨリ之ヲ抑制セズ会社  
ヲ結び事ヲ企テ或ハ書ヲ印行シ或ハ法教ヲ信ズルガ如キ政府ヨリ毫  
モ束縛スル所ナシ其所有ノ物ヲ用フルガ如キ亦政府ヨリ之ヲ限制ス  
ル能ハズ（卷之一 三十九丁ウ）

内田は要領よく簡潔に「独立不羈」<sup>フリースドム</sup>を解説しているが福沢のような具  
体性はない。内容は両方とも西洋の紹介であるが内田は地理に重点をお  
いた記述なので説明も簡潔なのである。しかしそれにしても福沢の国民  
開明の方法は内田よりもその具体性において、また説明に用いる材料に  
おいて数段も啓蒙的である。

なお割注についてももう少し例を引くと「馬車ヲ以テ家業ヲナスモノ  
<sup>江戸ノ駕籠屋ノ如シ</sup>（初編卷之一 九丁オ）」とか「弟子入 <sup>職人等ノ年期ヲ定メテ弟子トナルヲ云フ</sup>  
（初編卷之一 十丁オ）」のように日本人が自分の生活を通して理解で  
きるようにわかりやすく書かれている。

## (二) 史記の記述について

福沢が『西洋事情』で主眼としたのは西洋各国の紹介であった。備考  
は文字通りそれに備えたものであった。各国の紹介は一国ごとに、史記  
政治 海陸軍 錢貨出納の順序に述べてある。ここでは史記を取り上  
げる。

### 1 本紀に相当する箇所

史記は本紀、世紀、列伝などのような区分けがあるわけではない。福  
沢が米国や英国で購入した歴史書から訳述したものである。その史記か  
ら大統領や国王に関する記述を抜き出してみた。

(1) 華盛頓職ニ任ジテヨリ国用ヲ節シ賦税ヲ平ニシ国内ノ經濟ヲ修メテ  
富国ノ基ヲ立テ外国ノ交際ヲ厚クシ信義ヲ失ハズ此時ニ当テ歐羅  
巴ノ諸国ニ争戦アリシカトモ合衆国ハ固ク中立ヲ守リ嘗テ之ニ關係  
セシコトナシ在職八年ノ間内外無事ニシテエルモントケンチュッキ  
テンネッシーノ三州。合衆国ノ版圖ニ歸シタリ○千七百九十七年華  
盛頓職ヲ辞シ<sup>ジョン</sup>。アダムス代テ大統領ニ任シタリ是ヨリ先キ我  
政府。外国トノ交際ニ中立ヲ守テ他国ヲ助ケサルヲ以テ仏蘭西人之  
ヲ憤リ合衆国ノ貿易ヲ妨ケ或ハ兵ヲ挙テ来リ政<sup>ア</sup>（注 攻の誤植）ント  
スルノ勢アリ是ニ於テ大統領アダムス陸軍ヲ備ヘ海軍ヲ増シ華盛頓  
ヲ以テ陸軍ノ總督ニ命シタレトモ其後華盛頓ハ病死シ且又幸ニシテ  
仏蘭西ノ事モ平キタリ千八百一年アダムス職ヲ去リゼッフェルソン  
代テ大統領ト為リ其後仏蘭西ト約束ヲ定メ千五百万「ドル」ヲ  
仏ニ与ヘテ其領地ロイシャナ州ヲ合衆国ニ并セタリ（初編卷之二  
十一オ―十二オ）

(2) 是ニ於テ英国ノ王位ハ其兄ロベルトニ伝フヘキ理ナレトモ此時ロベ  
ルトハ遇マパレスタイン <sup>亜細亞州西南ノ地</sup>ニ出師シテノルマンデニ在ラサル  
ニ由リ弟ヘヌリ間ニ乘シテ英国王ノ位ニ即クコトヲ得タリ之ヲ第一

世ヘヌリトスヘヌリ位ニ即テヨリ元トノ「サクソン」王エドガルノ姪  
女マチリダヲ娶テ「サクソン」家ヲ同一ノ系統ニ并セリ○其後ヘヌリ  
ハ師ヲ起シ兄ノ所領ノルマンゾヲ攻メロベルトノ帰路ヲ要シ迎ヘ戦  
テ遂ニ之ヲ禽ニシ終身獄屋ニ幽閉セリ然レトモヘヌリ王ノルマンデ  
ヨリ凱陣ノトキ海上ニテ唯一人ノ男子溺死シタルハ兄ニ敵対セシ罪  
科ノ報ヒト云フヘシ一千百三十五年第一世ヘヌリ死シ其姪ステーフ  
エン立ツ（初編卷之三 六ウ）

例文の(1)が米国、(2)が英国である。例文(1)は初代大統領華盛頓<sup>ワシントン</sup>の治績  
を記し、その間歐洲の戦争の時は中立を守ったこと、また三つの州が合  
衆國に合併されたことが簡潔に述べられている。大統領の交替の記述  
は、その交替の年を記してから「華盛頓職ヲ辞シジョン・アダムス代テ」  
とか「アダムス職ヲ去リゼッフェルソン代テ大統領ト為リ」のように新  
旧の大統領の名を記している。その治世下の出来事を記す時には例文に  
見られるように「此ノ時ニ当テ」「此レヨリ先」「此ニ於テ」など漢文  
訓読特有な言い方を用いて叙事を進める。また史記の記述には因果応報  
の思想が見られるけれども例文(2)にも「唯一ノ男子溺死シタルハ兄ニ敵  
対セシ罪科ノ報ヒト云ヘシ」と記している。次に人名国名などの表記で  
あるが、当時一般に流布していると福沢が認めた漢字表記（後述）は  
そのまま使い、そうでないと判断したものは片かなで表記している。  
片かな表記の場合は例文では便宜上傍線にしたが原文は西洋人名は「」

でかこみ、国名地名は「」でかこんである。西洋人名や国名地名の発音  
の記し方は当時のものとしては原音に近い表記である。福沢は『西洋事  
情』刊行の前に「増訂華英通語」<sup>(15)</sup>を刊行しているがそれには片かなで発  
音を表記する際のいろいろな工夫が施されている。その凡例によれば次  
のようである。

(1) 音訳国字の内、小さき字の有る者は、急口低音、口内にて之を読むを  
要す。

(2) ウワに濁点を附する者は、ブバとウワとの間の音なり。

(3) ヌの字は急音にて上の字と合せて之を読むを要す。稍ヤンの音に近く  
して自ら別有り。（岩波版『福沢諭吉全集』第一巻所収のものに拠る。

上の番号は筆者が施したもの。）

これを例文で見ると(1)に該当するのはケンチュッキ、テンネッシー、  
ジョンなど、(3)に該当するのはヘヌリである。(2)に該当するのは『西  
洋事情』には見当たらない。これに相当する箇所は「フィクトリヤ」「バ  
タフィヤン」のようにフィを表記している。日本語の音韻体系には存在  
しない発音を日本人に教えるのには今日では分からない苦心をしたと思  
う。これは清國でも同様であり、また先輩格であるが『増訂華英通語』  
には清國人子郷の苦心が見られる。

国名や人名の片かな表記は現在ならごく当然のことであるが当時とし  
ては福沢の方法は非常に新しいものであった。たとえば『西洋事情』や

『輿地誌略』と並んで明治の三書と言われる中村敬字の『西国立志編』(明治四)では惹迷士<sup>ジユムス</sup>。瓦德<sup>ウァイト</sup>とか士提反孫<sup>ステフソン</sup>のような表記である。そしてまたこのような表記が一般だった。福沢が地名人名について述べたものがあるので参考までに引用してみよう。

地名人名等は西洋の横文字を読んで略その音に近き縦文字を当ることなれば古来翻訳者の思々に色々の文字を用ひ同じ土地にても二も三も其名あるに似たり又或は唐人の翻訳書を見て其訳字を真似したるもありこれは唐の文字の唐音を以て西洋の字音<sup>もじ</sup>に当たるゆへ唐音に明るき学者達には分るべけれども我々共には少しも分らず故に此書中には勉て日本人に分り易き文字を用るやふにせり実はいろは計り用ても済むへき筈なれとも本字を記して脇へ仮名を附れば記憶するに便利なり『世界国尽』凡例 六丁オウ 総ふりがなを略す。

この引用文中にある「いろは計り」が『西洋事情』の表記である。なぜそうしたかはこの引用文で理解できる。ただしこの引用文の少し後に「多くの訳書中に普通なる文字(注 一般に通用する漢字表記)は無理ながらも其まゝ用て」とあるので『西洋事情』の例文(1)の華盛頓などはこの類であろう。

(3)第十四世ロイス位ニ即クトキ年僅ニ五歳先王ノ遺命ニ由リ太后政ヲ撰シ王ノ叔父オルリンスノ君コレヲ補佐セリ中略ロイスノ為人父ニ異ナリ天資豪邁ニシテ英斷アリ恒ニ自カラ謂ラク天ノ人君ヲ生

スルハ天ニ代テ事ヲ為サシメントスルノ趣旨ナレハ必スコレニ一種ノ明德ヲ附与スルモノナリト其説殆ント夢想ニ近シト雖トモ之ヲ信シテ疑ハス既ニ自尊ノ心ヲ生シ功ヲ貪テ飽カス難ニ遭テ恐レヌ遂ニ一世ノ洪大ヲ致シタルナリ中略当時仏蘭西ニテ富用国利ノ術ヲ施シ政府ノ歳入モ饒ナルヲ得シハ実ニ宰相コルベルトノ功ナリ衣食漸ク治ネクシテ智学モ亦次第ニ進ミ文明開化期シテ待ツ可キノ勢アリ(二編卷之三 二二丁ウー二四丁オ)

(4)既ニ本国ノ苛政ヲ厭ヒ顧テ一線ノ水ヲ隔テ英吉利ヲ望見レバ亜米利加ノ戦争ニ利ヲ失フト雖トモ自国ノ政体ハ嘗テ変動セス人民皆自由ノ風化ニ俗シ意気揚々トシテ太平ヲ樂メリ仏人ハ内外ノ景況ニ比較シ彼ヲ想ヒ此ヲ見テ自カラ亦寛大自由ノ風ヲ慕ハザルヲ得ス(二編卷之三 四十丁オウ 注 ルイ十六世時代に仏人でアメリカ独立に力を貸した人々の自国批判)

福沢の史記の記述には文明開化(例文3)や自由の精神(例文4)についての観点が導入されるのは当然であろう。他にも「人々皆門閥ヲ貴フノ政ヲ嫌テ自カラ不羈独立ノ意ヲ生シ」(初編卷之三 二四丁ウ)などの記述が見られる。初編卷之二の亜米利加合衆国の史記ではジェファソン起草の独立宣言および合衆国憲法(『西洋事情』では律例)が掲載されている。ここにも福沢の啓蒙意図が十分にうかがわれる。2伝記など



此時ニ至ルマテペイトルハ嘗テ教育ヲ被リシコトナク性情猛劇ニシテ沈湎冒色ノ惡習ヲ成セリト雖トモ天稟果斷ノ英才ヲ抱テ一時ニ国内ノ改革ニ從事シ新ニ軍制ヲ立テ將士ノ階級ヲ定メ天子躬カラ兵士ノ列ニ加ハリ鍛練ノ実功ヲ以テ次第ニ登級シ国内ノ貴族ヲシテ尽ク其例ニ効ハシメリ又古來魯國ニ船舶ナキヲ患ヒ和蘭及ヒフエナイスノ船工ヲ雇テ小船ヲ造ラシメコレヲペイプス湖ニ浮ヘリ蓋シ魯國海軍ノ濫觴ナリ中略又ペイトルハ其國人ノ風俗ヲ觀テ未タ蠻野ノ臭ヲ脱セサルヲ患ヒコレヲ文明ニ道カンカ為メ専ラ歐羅巴西方ノ諸國ニ交ヲ結ヒ其物ヲ見其言ヲ聞キ其流風ヲ自國ニ移サントセリ且又自己ノ無學ナルヲ知リ深クコレヲ耻テ独リ自カラ謂ヘラク人ヲ教ヘントスルニハ己レ自カラコレヲ學ハサル可ラスト乃チ國事ヲ棄テ微服シテ外國ヘ遊學セリ于時千六百九十七年ナリ近臣數人ト共ニ國ヲ去リ先ツ和蘭ニ行キサルダムノ造船局ニ入テ造船ノ役夫ト為レリ伝ヘ云フ當時ペイトルハ毎朝早起自カラ茶ヲ煎テ食シ食終テ業ニ就キ終日勉強シテ賃錢ヲ受ル事尋常ノ役夫ニ異ナルナシト又云フペイトルハ身体長大ニシテ力アリ歩行疾速ニシテ業作輕快顔面肥大ニシテ円ク眉毛茶褐色ニシテ卷髮屈回其容貌コレヲ一見シテ怖ル可シト(二編卷之二 七丁ウ—九丁オ)

ペイトルがロシアを文明の域に向わせようとして自ら率先事に當った努力は、当時の日本の状態を支那とともに半開と見て日本を文明に導こ

うとしていた福沢にとっては共感を覚えるものがあつたであらう。(16) ほとくに詳しく力を入れて書いている。ペイトルの性格や行動を中心にした記述であるため読物としてもおもしろい。ペイトルが興味ある材料ということもある。なお例文中の「伝ヘ云フ」とか「云フ」などはエピソードや容貌など治績以外の挿話を導くために用いている。

ところで福沢が人物の性格を記す場合には例文に見られるように性情猛劇、沈湎冒色、天稟果斷ノ英才のように漢語で簡潔に述べている。他にも「其性情猛烈ナルヲ以テ世人コレニ綽号ヲ附テテリブルイワント云ヘリ『テリブル』トハ恐ル可キノ義ナリ(二編卷之二 四丁ウ—五丁オ注 ロシア皇帝第三世イワン)」とか「第十八世ロイスハ溫良ノ君ニテ(二編卷之四 九丁オ)」「チャーレス暗弱ニシテ國政大ニ乱ル(二編卷之四三丁オ)」などいろいろある。

### (三) 修辭

ナポレオン既ニ諸邦ノ兵ヲ破リ其志願ハ唯英國ヲ厭例(注 圧倒の誤植)スルノ一事ナレトモ英ノ海軍ハネルソンノ勇略ヲ以テ向フ所勝タサルハナシ概シテ云ヘハ仏蘭西ハ陸ニ敵ナク英吉利ハ海ニ敵ナシ獅子山ニ嘯キ蛟竜水ニ蟠リ互ニ雌雄ヲ争テ互ニ近ツクヲ得ス(二編卷之三 四九丁ウ)

ナポレオン此事情ヲ察シ密ニエルバ島ヲ脱シ千人許ヲ從ヘテ仏蘭西ノ南岸カン子スニ上陸セリ実ニ千八百十五年第三月一日ナリ全國ノ

人。帝ノ上陸ヲ聞キ未タ其挙動ヲ見サルモ既ニ其名ニ帰服シ帝旗ノ向フ処簞食壺漿シテコレヲ迎ヘサルハナシ（二編卷之四 九丁ウ）  
例文中筆者が圈点を施した所は隠引法にあたるものだが、漢文調の型にはまった表現である。やはり福沢の漢籍の教養は文章を書く場合の根底にあることが分かる。

西洋ノ諸国ハ其風俗言語各々異同アレトモ新ニ開タル支那日本ノ風俗ト西洋ノ風俗ト相異ナルカ如クナラス其各国交際ノ模様ヲ譬テ云ヘハ日本ノ諸侯ノ国々ニテ互ニ附合スルカ如シ（初編卷之一 二十丁オ「外国交際」）

これは挙例法の例である。他に「例ヘバ云々」という説明も多い。福沢はこのように常に日本の実状に合わせた説明をする努力を惜しまない。このことはすでに述べたように割注についても言えることである。

#### 四 翻訳文について

『西洋事情』はすでに記したように翻訳が多い。福沢の翻訳の態度は師緒方庵洪の翻訳の教え（既出）<sup>(17)</sup>もあり達意を趣旨とした訳文で翻訳臭がない。『西洋事情外編』は三冊ともチェンバース読本『ポリチカルエコノミー』の前半を中心とした翻訳である。この翻訳については伊藤正雄氏のご論考があるので参照されたい。<sup>(18)</sup>ここでは訳文の一節を原文とともに参考までに掲げておくにとどめる。

人間ノ交際ハ家族ヲ以テ本トス男女室ニ居ルハ人ノ大倫ナリ子生レ

テ弱冠ニ至ルマテ父母ノ膝下ニ居テ其養育ヲ受ルモ亦普通ノ大法ナリ（『西洋事情外編』卷一「家族」二丁ウ）

The married life is evidently productive of happiness, and tends to the good of society. It is therefore much more likely to be the dictate of nature, or appointment of God, than any opposite arrangement. Among the lower animals, wherever the young are at once independent of the parent, there is no pairing; wherever the progeny are brought into the world in a tender state, requiring the care of both parents, there the pairing arrangement exists, however temporary. The young of the human race are eminently delicate in infancy, and remain long in that state; there, accordingly, the marriage state is peculiarly called for, and there, we may be assured, the tendency to it has been planted by nature with peculiar care. (*The Family Circle*)

当時の福沢にとっては洋書は日本を文明開化に導くための材料として用いられたのであって忠実な訳であることよりも大意が分ればよかった。原文に即した言い方をするなら「結婚生活は明らかに幸福を生み出すものであり、社会の善というものに傾くものである。故にそれはどんな対称的な配列よりもっと神の約束とか自然の命令によるものである

る。低級な動物の間では若いものが親から一度独立する時はどこでも一緒ににはならない。下略」と言った忠実訳はとらない。これは啓蒙期における翻訳の方法の一つのタイプである。すなわち学そのものの手引書ではなかったからである。また当時は翻訳を急いでしなければならぬ時代の要求もあった。たとえば福沢がこの『ポリチカルエコノミー』の前半しか訳出しなかったことを彼は次のように記している。

チャンブル氏ノ経済書ハ書中論説ノ大段ヲ兩部ニ分チ前部ニハ人間交際ノ道ヨリ各国ノ分立スル所以、各国ノ交際、政府ノ起ル所以政府ノ体裁。国法風俗。及ヒ人民教育。等ノ箇条ヲ説キコレヲ「ソサイヤルエコノミー」トシ後部ニハ経国済世ノ事件ヲ論シコレヲ「ポリチカルエコノミー」トス然ルニ頃日社友神田氏所訳ノ経済小学二冊ヲ得テ之ヲ閱スルニ其事実第二段ニ載スル所ト略相似タレハ畢竟又大同小異ノ書ニ過ス因テ余ハ唯本書中首ノ一段ヲ訳シ其余経済論ノ詳ナルハ姑ク閣シテ之ヲ小学ニ譲レリ故ニ此書ヲ読ム者ハ必ス経済小学ト参考シテ始テ全昇（注 鼎の俗字）ノ真味ヲ知ル可シ但シ余カ此書ノ全部ヲ訳セサルハ敢テ其勞ヲ憚ルニ非ラス抑方今文化益開ケ翻訳ノ書陸續世ニ出ルト雖トモ固ヨリ彼ノ百科万端ノ學術有限ノ力ヲ以テ無限ノ書ヲ読ムカ故ニ仮令吾社ノ翻訳ヲ業トスル者各科目ヲ分チ力ヲ陳テ之ヲ訳スルトモ其全備ヲ期スルカ如キハ甚容易ナラス況ヤ今大同小異ノ書ニ於テ無益ノ勞ヲ費サンヨリ寧ロ其力ヲ他

#### 『西洋事情』の文章

書ニ用ヒ務テ新奇有益ノ事件ヲ訳シ広ク之ヲ世ニ布告センニハ如カス是余カ此書ノ全部ヲ訳セサル所以ノ鄙意ナリ（外編題言 一丁ウー二丁ウ）

この文章は当時の事情を如実に物語っているものと言えよう。

（未完）

#### 注

- (1) 西洋事情は余が著作中最も広く世に行はれ最も能く人の目に触れたる書にして、其初編の如き著者の手より発売したる部数も十五万部に下らず、之に加ふるに当時上方辺流行の偽版を以てすれば二十万乃至二十五万部は間違ひなかる可し。（『福沢全集緒言』岩波版『福沢諭吉全集』第一巻26P 昭和47年刊による。以下岩波版とあるのはこれに拠る。）
- (2) 西洋事情は恰も無鳥里の蝙蝠、無学社会の指南にして、維新政府の新政令も或は此小冊子より生じたるものある可し。（前に同じ。29P）また、五箇条の御誓文は『西洋事情』から影響を受けているようだと尾佐竹猛氏は指摘しておられる。（「法律家としての福沢先生」『三田評論』昭和7・11）
- (3) 時の將軍徳川慶喜に『漢字御廃止之議』を建白した。
- (4) たとえば西周の『百一新論』や加藤弘之の『交易問答』『真政大意』清水卯三郎の「ものわかりの はしご」などは啓蒙的意図をもって文末をゴザル体やである体で書く試みをしている。
- (5) 俗文体と言えは戯作文体をさすのが普通だが、ここの俗文とはこのようなものではなくて、書きことばの中でも日常的な書簡体やあるいは話しことばに近い表現をもつ実用文を言っており、通俗文体と称すべきものかと考える。今は「福沢の俗中の俗文」という意味でこのように称えておく。そうしないと福沢の文語体との区別がつかない。

- (5) 種々様々の物理書を集めて其中より通俗教育の為に必要なりと認るものを抜抄し、原字原文を余処にして唯その本意のみを取り、恰も国民初学入門の為に新作したる物理書は窮理図解の三冊なり。(『福沢全集緒言』岩波版『福沢諭吉全集』第一巻34P)
- (7) 『福沢全集緒言』岩波版『福沢諭吉全集』第一巻37P
- (8) 山本正秀「福沢諭吉の『世俗通用の俗文』の創始」『近代文体発生の史的研究』104-116P (昭和40・7刊 岩波書店)
- (9) たとえば「世人夫ノ地理以下ノ諸学ニ於テ其速成ヲ欲スルカ為メニ或ハ之ヲ読ムモノ甚稀ナリ実ニ学者ノ欠典ト云フヘシ」(『小引』『西洋事情』初編卷之一一丁ウ)
- ここに言う学者は学問をする人の意味であるが武士階層が多い。
- (10) 『福沢全集緒言』岩波版『福沢諭吉全集』第一巻25P
- (11) 岩波版『福沢諭吉全集』第一巻の『後記』615-624P
- (12) 「此条(注 備考)ハ去ル文久辛酉ノ年余カ欧羅巴ニ航シテ現ニ聞見セシ所ノモノヲ手録シ」(『小引』初編卷之一 三丁-四丁オ)
- なおメモ作成の苦心は『福翁自伝』に詳しい。
- (13) 『自由』小考『東京女子大学創立五十周年記念論文集 日本文学科編』所収
- (14) 「近年文運大ニ進ミ文人学士ノ著述無慮数千百種ニシテ其最世ニ行ハレシハ福沢君ノ西洋事情、中村君ノ西国立志編ト此輿地誌略ヲ以テ巨擘トス」(『輿地誌略』卷十の西村茂樹の叙言)
- (15) 福沢が万延元年米国に派遣された際にサンフランシスコで清国人子卿の著わした『華英通語』を入手した。これは英語の単語に漢字で発音と訳語がついている。福沢はこれに日本の片仮名で発音と訳語とをつけて『増訂華英通語』を作成した。子卿の外国音の漢字表記は福沢の片かな発音表記に影響を与えたと考えられる。
- (16) 安政年間には、佐久間象山や横井小楠らもペートル大帝の業績に関心をも
- っていたと言う。(参照高橋昌郎『中村敬字』25P 昭和41・10刊 吉川弘文館)
- (17) 「緒方先生は前にも云ふ如く一向字句に構はず、荷蘭の文法を明にして其難文を解釈するは最も得意なれども、翻訳の一段に至れば原書を輕蔑して眼中に置かず、其持論に曰く、抑も翻訳は原書を読み得ぬ人の為めにする業なり、然るに訳書中無用の難文字を臚列して、一読再読尚は意味を解するに難きものあり、畢竟原書に拘泥して無理に漢文字を用ひんとするの罪にして、其極、訳書と原書と対照せざれば解す可らざるに至る、笑ふ可きの甚しきものなり」(『福沢全集緒言』岩波版『福沢諭吉全集』第一巻4P)
- (18) 伊藤正雄「『西洋事情』の福沢思想史上における重要性」(『福沢諭吉論考』所収137-173P 昭和44・10刊 吉川弘文館)

〔本学短期大学部教授(国語学) 一九七三度 個人研究員〕